

1 はじめに

この講義は①教育研究、②学校での授業実践、③地域教育施設見学の3つの交流活動を通して、グローバル社会の教育課題を理解する方法論を実践的に獲得することを目的としている。今後、今以上に人種や国境を越えて、交流していく時代になる。日本から出る、出ないに関わらず、日本は急速にグローバル化していく。これからの将来、今の小学生が20年後、30年後の日本をつくると考えると、それに対応できる子供を育てなければならない。そのためには、言葉の壁、文化の壁、心の壁を小学生段階から取り払う必要があると強く感じている。自分自身の中にある構築されている壁を壊す必要性を他の講義で実感し、受講し訪中することを決意した。

2 3つの交流活動を通じた異文化理解

在籍校において、世界はつながっていることについて事前に授業を行った。そして、在籍校の子供たちの交流の場としてのオンライン授業を実施した。言葉の壁、距離の壁についてもなくなった。子供同士の手書きのメッセージ交換、至る所で見られた歓迎の言葉やイラスト、電光掲示板の歓迎の言葉も見て、心の壁がなくなった。現地に行き、実際に街を歩き、中国に対する意識が大きく変わった。「食」を通じた交流、つたない英語と翻訳アプリを使用する。1つの円になって互いの顔を見ながら食べる。一人ずつの挨拶、中国の先生方はみな、日本人への敬意や感謝をしつとりと伝えてから話し始めることが印象的であった。心温まる言葉と真剣な表情で伝えていることが理解できた。文化の壁、心の壁を作っているのは自分である。「食」を通して互いに理解することができ、中国の文化や人々の暮らしに触れることができた。互いに理解し合うことこそ、グローバルな視点であることを実感した。



3 授業研修でのグローバルな視点

授業を行った惠州実験学校、CAREY School では、授業研究のための設備が整っていた。教室には多数のマイクとカメラが設置され、参観者が授業に影響を与えることはない。右の写真は、参観者の視点であり、教室の背面はマジックミラーになっているため、授業をしている教室を後方から見る事ができる部屋である。カメラで映像が映し出され、教室内の声もマイクを通してはっきりと聞くことができる。こうした環境にお金をかけていることが分かった。また、教師の研修の場と時間も保障されているということであった。教師の授業構成、子供への対応、そして何より子供の語る姿に感銘を受けた。また、我々のした授業は紙ベースによる活動がベースであったのに対して、参観したほとんどの授業は、ICTを活用し、問題解決的な議論をベースとしていた。授業設計や教材の提示方法について再考するきっかけとなった。



4 おわりに

今回の学びを、自分だけの実践に留めることなく、つなげ、伝え、広げていく。それが、これからの教育をよりよくしていくことにつながると考えている。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった日中の先生方、準備から現地での通訳までお世話になった周さん、石さん、そして、この大学間の交流関係をこれまで長くつないでくださった方々に心から感謝申し上げます。